キリスト教と多文化共生の思想（1）
―デズモンド・ツツとウブントゥ的キリスト教―

大 倉 一 郎

はじめに
１．南アフリカと多文化共生の課題
２．キリスト者ツツの人と政治的・社会的実践
３．ツツにおけるウブントゥ思想とキリスト教
おわりに

キーワード　多文化共生　デズモンド・ツツ　南アフリカ　アパルトヘイト　ウブントゥ
キリスト教

はじめに

現代の国民国家は、グローバリゼーションの進行とともに、過去半世紀の間にその国民構成に見られるエスニシティの多様化において著しい変貌を遂げた。しかし、その過程は批判的な検証を避けられない歴史体験だったと言わざるをえない。とりわけ国民概念の周縁に政治的かつ文化的立場を位置づけられたエスニック集団にとって、国民の歴史とはしばしば恥辱を伴う記憶であった。国民国家の政策や制度における､過剰なナショナリズム、ゼノフォビア、レイシズム等々がしばしば深刻な社会危機や不安を醸成し、時として暴力的迫害や弾圧、蜂起や抗争を生起することも稀ではなかった。それは今日まで繰り返されているばかりか、今なお時と場と形を変えつつ、人々に苦難を強いるグローバルで主要な問題の一つを構成しているとさえいえるであろう。

しかし同時に、そのような国家と社会の行き詰まりを打開し、危機の克服と国民統合を図る試みが繰り返し試みられてきたことも事実である。それは国家による政策や制度という範疇にとどまるものではない。市民的立場での、個人による、また社会集団による運動として、またそれに結びついた思想的言説として表現されてきたのである。本稿の考察は、そのような運動や主張の中で、国家の現状批判と市民の社会的再統合を試みる言説を多文化共生の可能性を模索する思想と見なす立場をとる。その立場から、デズモンド・ムピロ・ツツ（Desmond Mpilo Tutu　1931 ～）のキリスト教思想を取り上げる。彼の思想を南アフリカの黒人キリスト教的文脈からアパルトヘイト国家体制の終焉と多人種・多民族和解と多文化的国民統合を模索するメッセージと認め、その多文化共生思想としての意味を探る。

ツツの思想はキリスト教信仰と南アフリカ黒人文化との出会いにおいて形成された。しかも注目すべきは、その出会いの場とは、人種主義による社会分裂の危機とその政治的・社会的克服が緊急に要請されるという限界状況の場であったことである。その意味で彼の

言葉は、多くの場合、状況に向かって発せられた断片的言説となっている。言い換えれば、ツツの思想は学究的関心に基づいた論理化と体系化を基本的動機とはしていない。多人種・多民族共生を志向しつつ、限界状況に対峙して何よりも先ず実践的課題に発せられた実践のための実践者の思想である。

本稿の全体構成は冒頭に記したが、本論各節の内容を要約すれば以下の通りである。

1. **南アフリカと多文化共生の課題**：南アフリカ共和国にとって、アパルトヘイト体制的統合を止揚した多人種・多民族間の和解と国民としての再統合が課題である。それは多文化共生的な社会の実現を目指すという課題でもある。
2. **キリスト者ツツの人と政治的・社会的実践**：アパルトヘイト体制は南アフリカのキリスト教を分断し再編する政治的・社会的圧力であった。その桎梏を克服する試みを形成したのは主として黒人キリスト教であった。ツツは黒人キリスト教の思想圏における実践的かつ思想的指導者の一人と捉えることができる。
3. **ツツにおけるウブントゥ思想とキリスト教**：ツツにおける多文化共生の思想はウブントゥ的キリスト教思想という表現で捉えることができる。それは深刻な対立を伴う異人種・異民族・異文化集団間において和解を形成することを目指すキリスト教的思想の試みである。

1. 南アフリカと多文化共生の課題

歴史的に遡れば、南アフリカ地域には、紀元前に狩猟民族コイサン人が到来し、紀元 3 世紀以降バンツー系アフリカ人（黒人）が先住民族として定住し始めた。1487 年のポルトガル人来航から西欧諸国との接触が始まり、17 世紀中葉のオランダ人移民（ボーア人とも呼称され、今日ではアフリカーナーと総称する）の占拠を見た。しかし、17 世紀末には後続して占拠を図った英国人がケープ植民地をオランダから奪取してしまう。それに伴い英国勢力及び先住民と抗争しつつ内陸部に占領地を移していったアフリカーナーも、最終的には英国人の支配に屈した後、両者が白人支配層を成し、先住アフリカ人はさらにその下に支配される植民地社会構造が形成された。その後、1910 年に英国人支配層の主導のもとに英連邦内で南アフリカ連邦が創設されるに至ったのである。

これに対してアフリカーナーを政治基盤とした国民党は 1948 年に政権を掌握し、ナチズムに倣ったとも言われる白人優位の人種主義を統治原理として国家の政策・制度を推進した。その一連の政策と制度を総称してアパルトヘイトと呼ぶ。アパルトヘイト体制は年と共にエスカレートし、非白人市民層、とくに黒人市民層への搾取と人権抑圧を極限的な状況に至らしめた。その中で 1961 年、国民党政権は英連邦を離脱して南アフリカ共和国を樹立するが、次第に国際的非難と孤立を深めていった。結局、国民党支配は 1994 年までの長期間に渡り、西欧植民地主義勢力の最後の牙城ともいうべき人種主義国家と人権抑圧社会が 20 世紀末まで継続したのである。

他方、黒人指導者によるアフリカ国民会議（African National Congress）を中心とす

る抵抗市民層は、アパルトヘイト体制の変革を求めて 1952 年から抵抗運動に入った。反アパルトヘイト闘争は次第に国際的規模の支持も集めて国民党政権を追い詰め、1994 年、全人種参加の大統領選挙の実施にいたった。その結果、アフリカ国民会議を率いたネルソン・マンデラが圧倒的勝利を収めて南アフリカ共和国史上初めての黒人政権が誕生、マンデラ政権はアパルトヘイト政策・制度の全面的撤廃を実行した。1996 年には新たに南アフリカ共和国憲法（Constitution of Republic of South Africa, 1996）[1] が公布され、南アフリカ民主化の総仕上げとして多人種・多文化国家の理念が掲げられた。

1996 年新憲法は、その第一章「基本的な条項」1 項 (b) に「反人種主義 (Non-racialism)」の立場を規定しており、第二章「権利の章典」30 項「言語と文化」では「何人もその言語を用いる権利、並びにその選択に基づく文化的生存（the cultural life）に参与する権利を有する」と規定している。多文化の存在とそれを生きる権利を国政の基本政策の一つとして明示した国家である。それは多人種・多民族国家において多文化共生を積極的に肯定し支持する法制的表現ということができるであろう。

今日の南アフリカ共和国の人種・民族構成において、マジョリティを占めるのは、南アフリカ地域の歴史的先住者であるバンツー系黒人市民である。次いで西欧諸国からの植民者をルーツとする白人層、その中にアフリカーナーと英国系白人層を含む白人市民がいる。さらに英国統治下に移入されたインド系市民、さらに異人種間の混血者を含めるカラードと総称される市民を数える。これらの人種・民族的国民構成は、まさに西洋植民地主義の南アフリカ征服史を如実に反映していると言って過言ではない。

看過しえない点は、この国民的構成は現在における経済的格差に伴う権力層の実体的構造をも意味している点である。一方に経済を握る富裕な白人層が存在する。他方で圧倒的多数の黒人市民層の貧困が存在して、極めて深刻な南アフリカ社会の課題となっている。400 年間余りに及んで歴史的に集積された格差社会の構造を変革することは現在の政治的民主化だけでは達成は極めて困難といえる。

さらに重要な点は、アパルトヘイト体制による長年の暴力的支配と抵抗の歴史は、多数の犠牲者と加害者を作り出してきたため、いまだ人種・民族間の対立が癒されてはいない現実である。その現実を変えていくための国民的和解は新憲法の理念を実質化する基盤となる要件である。マンデラ政権が国家として「真実和解委員会」（The Truth and Reconciliation Commission）を設置して強力にアパルトヘイト時代の克服をめざす政策を推進してきたのはまさにそのためであろう。同委員会の初代委員長を務めたのはデズモンド・ツツであった。

以上のように新憲法が政治的民主化によって開いた国民再統合の可能性は、多数の黒人層の貧困問題とその背景にある格差構造の変革という課題を中心に、いまだ未来の結実に属していると言うべきだろう。この課題と同様に南アフリカ社会における多文化共生もまた、憲法刷新によって現在すでに変革を開始しつつも、その多くは未来の実現に属している課題だといわねばならない。

2. キリスト者ツツの人と政治的・社会的実践

デズモンド・ツツは 1931 年、ヨハネスブルグの西方の町クレルクスドルフ（Klerksdorp）に生まれた。家庭はキリスト教徒の家族であった。少年時代に肺結核を患い、その療養生活を通じてトレヴァー・ハドルストン司祭（後に英国聖公会主教となり、ツツの有力な協力者となる）と出会い、感化を受けると同時に才能を認められ生涯の親交を得た。バンツー教育大学卒業後、教員となるが、1957 年アパルトヘイト政策の一環であったバンツー教育法（The Bantu Education Act）の立法化に抗議して辞職した。聖職者の道に進むべく神学教育を受けて、1960 年、南アフリカ聖公会司祭となった。この前後を通じて、南アフリカはアパルトヘイト体制が 69 人の死者を出したシャープビルの虐殺事件（1960 年）など流血の弾圧を招く事態へと進んでいった[2]。ツツは聖職者の職務をはたしつつ、反アパルトヘイトの活動に深くかかわっていった。

ツツの人物とキリスト教的アイデンティティーと思想を考える場合、彼が生きてきた現代南アフリカの政治的・社会的、さらにキリスト教的な時代状況との連関を考慮しなければならない。それらの動向に対してツツは黒人キリスト者の立場から敏感にかつ誠実に反応してきた人物であり、彼の思想の文脈はその時代状況に積極的に対峙した実践の軌跡の中に存在しているからである。その観点から以下にツツの政治的・社会的実践の跡をなぞらえてみる。

南アフリカを含めてブラック・アフリカ地域の大半は、1960 年代以降の西欧植民地主義からの政治的独立後も、新植民地主義の経済支配によって民主国家形成の困難に直面してきた。とりわけ南アフリカでは 1990 年代に至るまで新植民地主義的白人層が公然と体制支配を続けた。このような時代状況の中で、ブラック・アフリカにおけるキリスト教の存在もまた変革の様相を示してきた。西欧宣教師によってもたらされた伝統的キリスト教、すなわち白人キリスト教は、かつて植民地支配の強固なイデオロギーとして働いてきた。このような歴史性を帯びた白人キリスト教は独立を志向したアフリカ人によって信頼に値する宗教とは見なされなかった。他方、南アフリカにおいては、伝統的白人キリスト教、とくにアフリカーナーの信奉したオランダ改革派系教会は、アパルトヘイト体制補完の強力なイデオロギーとして存続していたのである[3]。

一方にこのような状況がありながら、他方で第二次世界大戦後のアフリカ独立の時代におけるブラック・アフリカ地域のほぼ全域でのアフリカ人キリスト教人口の爆発的拡大も事実であった[4]。しかし、それは植民地時代からの伝統的白人教会への流入ではなかった。独立後の政治的不安定と社会変動の中で、アフリカ人は社会的帰属意識の危機に晒されていたといわれるが、黒人大衆層は総じて新来のプロテスタント新興諸派やアフリカ宗教の土着性を取り込んだ分派キリスト教を広く受容した。

これに対して、公的機関、学校、病院施設、さらに旧宗主国とのコネクションなど白人支配者の社会的遺産を継承し、また活用し得る機会と技能を有する立場にあった黒人エリート層は伝統的キリスト教を文化的基盤として受容してきた。後者の階層の中から新生

国家形成の政治的・文化的指導者が登場している。ツツはそのような指導者たちの中の最良とも言う得る一人であろう。その際、これらのキリスト者たちは伝統的キリスト教のアフリカにおけるその過去への反省から、避け難いこととして批判的継承を試みる。同時にアフリカ人としてのアイデンティティーとの結合が模索される。ツツの思想形成にもそのことが妥当するであろう。彼のキリスト教思想は、彼が生きたアフリカ変革期の反植民地主義の歴史的文脈を抜きには語れないのである。

実際、ツツは、南アフリカにおけるアパルトヘイト体制（1924 年～ 1994 年）の崩壊にいたる人種差別撤廃と民主化の闘争において、卓越した統一的黒人指導者のひとりであった。ツツは、アパルトヘイト体制が白人支配の恒久化をめざして次第に過酷さを増す中、南アフリカ聖公会司祭としての叙任後、英国留学を経て 1967 年に帰国。主に大学付牧師として、フォートヘア大学やナタール大学で講義と学生指導に当たりながら、反アパルトヘイトの活動に努めた。1978 年から 1986 年までは、キリスト教諸教派が加盟し、反アパルトヘイト運動に連帯する南アフリカ教会協議会（SACC）総幹事を勤め、プロテスタント系キリスト教をまとめる立場で政治的・社会的実践に参与した。

1986 年に黒人として初めて聖公会南部アフリカ管区全域を統括（当時）していたケープタウン大主教に聖別された。その後も、ツツは 1988 年にはケープタウンの反アパルトヘイト・デモ行進で逮捕拘束されている。黒人教会指導者としてのその歩みにおいて、ツツはキリスト者としての自らの思想的確信に基づいて常に反アパルトヘイト闘争の最前線の一翼を担ったといえる。その社会的活動に対してノーベル平和賞（1984 年）を始め平和と人道のための様々な賞が授与されている。

南アフリカでは、1994 年の全人種参加選挙の結果、黒人指導者ネルソン・マンデラ（1918～）を大統領とする政権が誕生してアパルトヘイト体制を終焉に至らせた。しかし、その後の経済発展の中にも、人種間和解、貧富の格差克服、HIV 感染者救済などの困難な課題を抱えている。前述のようにツツは人種間和解と国民統合のために発足した「真実和解委員会」の委員長として指導にあたった。さらに HIV 感染者救済のためのネットワーク作り、非暴力及び自由と民主の立場から大国の戦争政策・テロリズム・暴力的支配・貧困を生む格差への反対と克服をグローバルなスケールの取り組みで訴え続けている。

日本との関わりについて言えば、ツツは 2006 年には日本を訪れ、チベット仏教の指導者ダライ・ラマ 14 世（1935～）、北アイルランドの平和活動家ベティ・ウィリアムズ（1943～）と共に、「広島国際平和会議 2006」でシンポジウムと講演を通じて参加者にグローバルな平和への取り組みと連帯を訴えかけた。ツツの平和への取り組みは、今日に至るまで南アフリカでの具体的な実践を通じながら、より広くグローバルな展開を示している。

3. ツツにおけるウブントゥ思想とキリスト教

ツツは平和のための行動的な社会指導者であるが、同時にまた、黙想と礼拝の意義を強調し霊性のあり方を重視する観想的なキリスト教指導者でもある。自らの思想を体系的に

語ろうとするような意味での神学者ではないが、キリスト教信仰に根ざしたその実践的で観想的な思想を説教・祈祷・書簡・著作などを通じて多くの機会に語ってきた。そのようなツツの幾多の発言を通じてみられる思想の特色とは、「あるアフリカ的洞察と旧約聖書に始まっている。」といわれる（M・Battle, 1997）。

ツツの示すアフリカ的洞察とは「ウブントゥ（ubuntu）」というングニ語（南アフリカのバンツー系諸語の総称）の言葉で表現される他者との共生意識である。ウブントゥについて、ツツは次のように述べている。「これは人間性の本質を指しています。私の人間性があなたの人間性と密接に絡み合い、固く結びついていることを物語っているのです。私は人類という家族の一員だからこそ人間なのです。ウブントゥはまた、完全性と思いやりについても語っています。ウブントゥがある人は、友好的でもてなし上手で、温かく寛大で、何でも喜んで分かち合おうとします。」（ツツ ,2005）。ツツによれば、このウブントゥの精神こそ社会と共同体の形成における排除、対立、分断に対して、調和、友好、幸福を目指す最高善ともいうべき規範なのである。

他者との共生を追求するウブントゥの精神性は、ツツにとって土着の伝統的規範意識というに止まっていない。ツツはこの精神性を彼のキリスト教理解の基本的視点として積極的に継承しようとしている。そのことが明瞭に現れるのは彼の聖書理解である。

先ずツツの旧約聖書理解には、ウブントゥの視点からの理解が色濃く示されている。ツツによれば、男女の創造の説話（創世記 2 章 6 節以下）が想起させるのは、神が互いを必要とする存在として人間を創造したことである。それゆえ人間は自己完結するのではなく共同的関係を持つべく定められ、「人間同士や神によって創造されたその他の生き物との精緻な相互依存のネットワークの中に組み込まれている。」（ツツ ,2005）という。

しかし、同時にツツは人間の自由の意義を強調する。人間創造の説話において重要なもう一つのメッセージは、神が人間を自由な選択意思を与えられた存在として創造したという点にあるという。それゆえ人間は本来的に自由を求めないでは生きられない。この創造による人間の本性によって、人間は抑圧的な政治や社会に抵抗するので、抑圧からの解放と社会の変革は避けられない。それゆえ政治における自由と民主を強調するのである。

次に新約聖書に関しても、ツツの視点はウブントゥの視点を根底にして展開しているといえる。その側面がよく現われているのは、アパルトヘイトから自由への全ての人間の解放という思想である。その思想はイエス・キリストの福音に根ざした和解への呼びかけを根底にしているといえる。彼はアパルトヘイトの悪から解放されねばならないのは、抑圧されている黒人だけではなく抑圧する白人も同様に解放されなければならないという。1976 年、バルタザール・J・フォルスター首相への書簡では、「イエス・キリストは、たとえ私たちがどんなことをしてきたとしても、私たちを不当に差別するもの、たとえば、人種、性、文化、肩書などを、ことごとく打破してきました。このイエス・キリストのうちに、私たちは黒人も白人もともに、ひとりの神によって救われた人間として永遠に結ばれているのです。」（ツツ ,1983）と述べている。ツツは解放者たるイエス・キリストの救

いに与る全ての人間への恵みとして、対立者相互の不可分の絆を訴え、アパルトヘイト撤廃への行動を意義づける。

このようにツツはウブントゥの精神性を解釈学的原理として聖書的教説を読み取り、さらに彼の生きる南アフリカにおけるキリスト教信仰からの洞察とメッセージを紡ぎだしていく。ツツのキリスト教思想とはそれらの実践的言説の集積であり、それはウブントゥ的キリスト教思想と表現していいであろう。

さらに注目すべきは、ツツはそのウブントゥ的キリスト教思想を南アフリカの歴史的・政治的現実の中に明確な倫理的判断として提示していることである。マンデラ政権下で進められた国民和解のための「真実和解委員会」の指導において、ツツは「赦し（forgiveness）」が求めるべき和解を実現するための基盤であると考えた（Tutu, 1999）。しかし、彼のいう「赦し」は、勝者（黒人政権や反アパルトヘイト支持者）が、敗者（国民党とアパルトヘイト支持者）に与えるような温情的な、あるいは政治的取引としての免罪や恩赦ということではない。それは正確にはウブントゥの精神性に立脚することであった。ツツは「真実和解委員会」の活動を回顧して次のように述べている。「ウブントゥが意味するのは、実に、アパルトヘイトの手先となり、それに熱心な支持を与えた者さえも邪悪なシステムの犠牲者だったと見ることです。」（Tutu, 1999）。ツツの言う赦しとは排除される者のない和解実現の行動であり、ウブントゥの共生的精神性が国民再統合のための根本的な規範であった。

共生の思想を規範として立つゆえに、ツツの視点は対立の構図の中でも彼我の人間存在を見失わない。わが子を ANC の攻撃で奪われながら、怒りを捨てて報復の誘いを断ったアフリカーナーの父親の中にも、私たちはウブントゥの精神性を学ぶのだと、ツツは認めることができる（Tutu, 1999）。さらにまたツツは南アフリカのみならず南部アフリカ諸国が白人支配からの解放後の歴史において国民和解と再統合のあり方をどのように進めえたかを根源から問うことができた[5]。権力者が交代しようとも、国民和解と再統合における平和の実現は誰であれ普遍的な責任なのである。権力の腐敗と民衆不在の争奪が繰り返されるブラック・アフリカ諸国においてツツの問いは根源的なかつ重要な問いではないだろうか。

ツツは、今日まで、よりグローバルな視野において諸国家間における紛争の犠牲者、また諸国家における被抑圧者の生存と人権を擁護し、そのメッセージを発し続けている。南アフリカの危機的な対立と暴力の時代に苦難を強いられた人々に寄り添って同行しつつ形成されたツツのウブントゥ的キリスト教思想は、その実践とともに語られる思想というもののグローカルな可能性を示しているといえるであろう。

おわりに

ツツは一方で西欧的・伝統的キリスト教を批判的に受容しつつ、他方で自らの黒人伝統文化に依拠して行動し発言することによって、南アフリカの多人種・多民族国家の形成に

必要とされ、人々に共有されうる平和的な和解と統合の価値観をキリスト教信仰の立場から提供したといえる。

ツツの思想はアパルトヘイト体制を正当化し補完した伝統的キリスト教の抑圧性を克服するための洞察を深めている。そこに同時に伝統的キリスト教への批判的視点が明確に形成されていく。例えば、ツツは教会職制における女性や同性愛者の完全な権利と参加を正当な要求とみなす。また他宗教に対するキリスト教の優越を説くことではなく宗派の垣根を超えた平和のための協働を実践する。このようなツツの発言と行動を諸教会、また個々のキリスト者はどのように受けとめるのであろうか。

ツツの思想を問いとして受けとめるのであれば、それは平和実現への歩みとともに今日のキリスト教そのものを問うという意味で、見過ごしにできない重要な問いであろう。グローバルな規模で進行しつつある多文化共生の時代は、人間化のための諸課題を提出している。その諸課題に実践をもって向き合う思想が、伝統的キリスト教自身の変革を深みから問いつつあることは確かである。

【注】

1 http://www.info.gov.za/documents/constitution/1996/96cons2.htm(2008/12/20)

2 とくに 1976 年ヨハネスブルク郊外の黒人地区ソウェトでの民衆蜂起が挙げられる。アフリカーンス語使用強制に反対してデモ行進した少年少女に武装警官隊が発砲。13 歳の少年ヘクター・ピーターソンが射殺された。これを契機に蜂起は南アフリカ全土に拡大した。

3 改革派が保持するカルヴァン主義的教理における「予定説」をアフリカーナーの人種主義的支配の正当化に適用したり、新約聖書ローマ書 13 章 1~7 節を国家権力への絶対的忠誠を命じるキリスト教倫理の根拠として提唱した。その誤謬に対する明確な批判が南アフリカの反アパルトヘイト闘争を支持したキリスト者たちによって「カイロス文書（The Kairos Document)」（1985）として公刊されている。

4 1976 年の時点で、英国聖公会のアフリカ宣教師エイドリアン・ヘイスティングスは、アフリカのキリスト教人口は 9 千万人を超えて増大しつつあると指摘して、次のように記している。「1950 年には、ひとたびヨーロッパの支配が終結したらアフリカの諸教会はどうなるだろうか、と自問していた人々もあった。・・事実、総じて独立後の歳月は、目覚ましいまでの教会の前進の歳月であったのだ。」(A. ヘイスティングス , 1988)。

5 「ウブントゥ」は南アフリカの国内に限らず、アフリカ南部諸国の言語・文化圏に共有されている伝統的共生意識であり、ツツの問いは広い受容の基盤を持っていたといえる。

参考文献

デズモンド・ツツ『ゴッド ハズ ア ドリーム　希望のヴィジョンで今を生きる』和泉主亮・利子・裕子訳、竹書房、2005 年

デズモンド・ツツ『南アフリカに自由を　荒れ野に叫ぶ声』桃井健司・近藤和子訳、サイマル出版会、

1983 年

Tutu, Desmond. *No Future without Forgiveness*. Rider, 1999.

Tutu, Desmond. *The Rainbow People of God: The Making of a Peaceful Revolution*. Doubleday, 1994.

エイドリアン・ヘイスティングス『アフリカのキリスト教　ひとつの解釈の試み』斎藤忠利訳、教文館、1988 年

田川健三『歴史的類比の思想』勁草書房、1976 年

Allen, John. *Rabble-Rouser for Peace: The Authorized Biography of Desmond Tutu*. Free Press, 2006.

Battle, Michael. *Reconciliation: The Ubuntu Theology of Desmond Tutu*. The Pilgrim Press, 1997.

Mandela, Nelson. *Long Walk to Freedom: The Autobiography of Nelson Mandela*. Little, Brown and Company, 1994.

Gruchy, John W.de. *The Church Struggle in South Africa.* (Second Edition) Collins, 1986.

フェリス女学院大学文学部コミュニケーション学科　准教授

（おおくら・いちろう）